

Japanese Literature

6



現代日本の文学

石川啄木
高村光太郎集
宮澤賢治

〈監修委員〉

伊藤 整

井上 靖

川端 康成

三島由紀夫

〈編集委員〉

足立 卷一

奥野 健男

尾崎 秀樹

北 杜夫

(五十音順)

学習研究社

現代日本の文学

6

石川啄木
高村光太郎集
宮澤賢治

全50巻
分割払価格 39,000円
現金価格 35,500円

昭和46年10月1日 初版発行

昭和48年2月1日 七版発行

石川啄木
著者 高村光太郎
宮澤賢治

発行者 古岡泰吉

発行所 株式会社学習研究社

東京都大田区上池台4丁目40番5号
郵便番号 145 振替東京 145
電話 東京(720)1111 大代表

印刷 大日本印刷株式会社

中央精版印刷株式会社

製本 中央精版印刷株式会社

本文用紙 三菱製紙株式会社

表紙クロス 東洋クロス株式会社

製函 日本紙パルプ商事株式会社

*この本に関するお問合せやミスなどがありましたら、
文書は東京都大田区上池台4丁目40番5号(〒145) 学習研究社
「ユーザー・サービス本部事務局」現代日本の文学部に
電話は、東京(03) 720-1111 内線352,353か、東京(03)
720-1600へお願いします。

Printed in Japan

0393-164 600-1002

石川啄木文学紀行



函館 青柳町

函館の青柳町こそかなしけれ
友の恋歌
矢ぐるまの花

握の砂

札幌に

かの秋われの持てゆきし
しかして今も持てるかなしみ

アカシヤの街樾にホブラに

秋の風

吹くがかなしと日記に残れり

しんとして幅広き街の

秋の夜の

玉蜀黍の焼くるにほいよ

「握の砂」



札幌郊外

東海の小島の磯の白砂に
われ泣きぬれて
蟹とたはむる

頼につたふ

ちみだのこはす

一握の砂を示しし人を忘れず

大海にむかひて一人

七八日

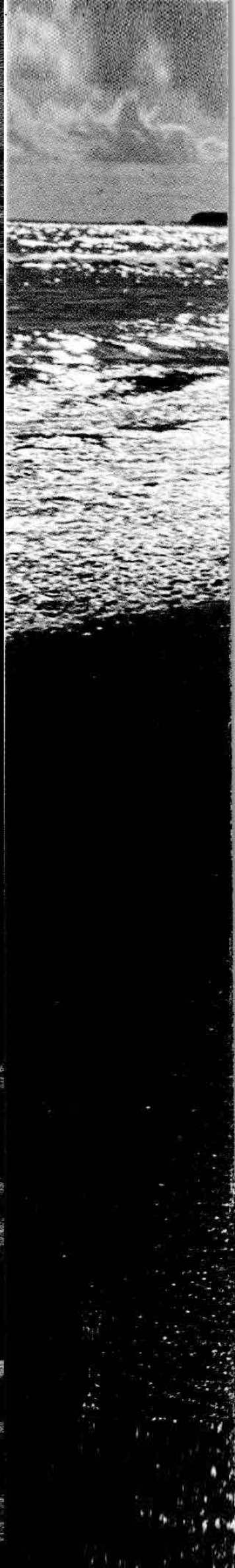
泣きなむとすと家を出でにき

いたく錆びしピストル出でぬ

砂山の

砂を指もて掘りてありしに

「握の砂」



しらしらと水かがやき
千鳥なく
釧路の海の冬の月かな

「握の砂」



遊民（現岩手郡玉山村）の北上川畔に建つ民家

高村光太郎文学紀行



「千鳥と遊ぶ智恵子」の碑 九十九里浜



二つに裂けて傾く磐梯山の裏山は
険しく八月の頭上の空に目をみはり
裾野とほく靡いて波うち
芒ぼうぼうと人をうつめる
半ば狂へる妻は草を藉いて坐し
わたくしの手に重くもたれて
泣きやまぬ童女のやうに慟哭する
——わたしもうぢき駄目になる

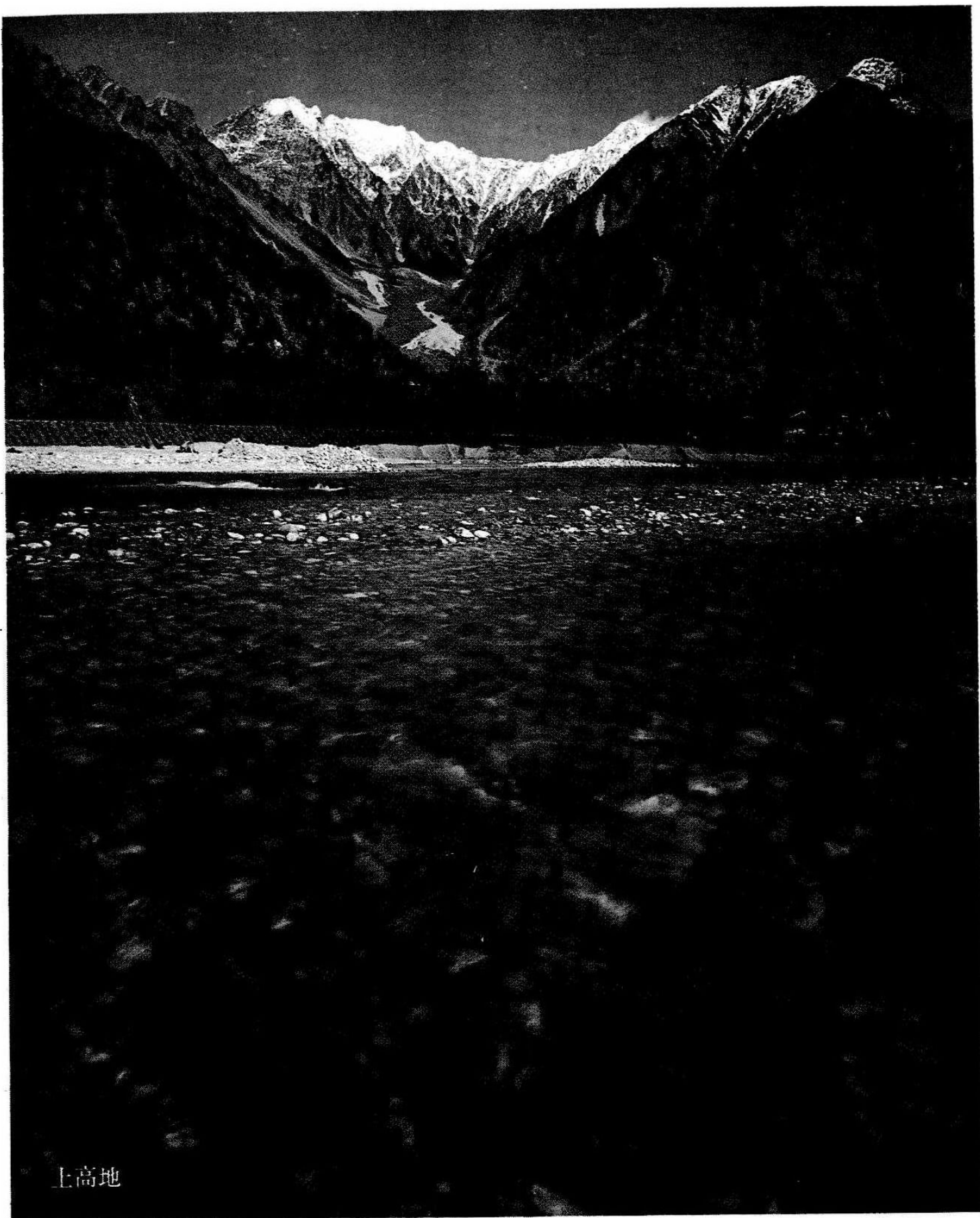
（「山麓の二人」より）

外では吹雪が荒れくるふ。
かういふ夜には鼠も来ず、
部落は遠くねしづまつて
人つ子ひとり山には居ない。
囲炉裏に大きな根つ子を投じて
みごとな大きな火を燃やす。
六十七年といふ生理の故に
今ではよほどらくだと思ふ。
あの欲情のあるかぎり、
ほんとの為事は苦しいな。
美術といふ為事の奥は
さういふ非情な要求するのだ。
まるでなければ話にならぬし、
よくよく知つて今は無いといふの
がいい。
かりに智恵子が今出てきても
大いにはしやいで笑ふだけだろ。
きびしい非情の内側から
あるともなしに匂ふものが
あの神韻といふやつだろ。
老ぼれでは困るがね。

「吹雪の夜の独白」



岩手県花巻 光太郎山荘



上高地

山の重さが私を攻め囲んだ
私は大地のそそり立つ力を
ここに握りしめて

山に向った

山はみじろぎもしない

山は四方から森厳な静寂を
こんこんと噴き出した

たまらない恐怖に

私の魂は満ちた

ととつ、とつ、ととつ、

とつ、と

底の方から脈うち始めた私
の全意識は

忽ちまっばだかの山脈に押
し返した

(「山」より)



狂った智恵子は口をきかない
ただ尾長や千鳥と相図する
(「風にのる智恵子」より)

夕景の九十九里浜

宮澤賢治文学紀行



北上川イギリス海岸

わたくしははつきり眼をあいてあ
るいてゐるのだ
ユリア ヘムベル わたしの遠い
ともだちよ
わたくしはずるぶんしばらくぶり
で
きみたちの巨きなまっ白なすあし
を見た
どんなにわたくしはきみたちの昔
の足あとを
白堊系の真岩の古い海岸にもとめ
ただらう

(「小岩井農場」より)



その散乱反射のなかに
古ぼけて黒くゑぐるもの
ひしめく微塵の深みの底に
きたなくしろく澱むもの

「岩手山」



岩手県 小岩井農場